

## 編集後記

◇『甲府市史研究』第八号をお届けします。

本号の執筆は市史編さん委員会の方針で部外者に依頼しました。市史研究が新たな視点・手法によって深化することを期待してのことです。

執筆者各位にはいずれも労作をお寄せいただき厚くお礼申し上げます。

◇渡辺洋子氏には前回(第四号・「宝永期柳沢家の甲府城殿舎について」)につづき玉稿をいただきました。

巻頭論文「竜華山永慶寺の建築について」は建築史・宗教史のうえで重要視されながらも不明の点の多い、永慶寺の造営と破却ののちについて、緻密な史料分析と大泉寺・禅林院・大和郡山など各地にわたる現地調査の成果をふまえた臨場感溢れる論考で、説得力があります。これまで技術面での検証に立脚した研究は少なく貴重な論究ででしょう。

◇小菅氏「満州事変期の軍国熱と排外熱―甲府市を事例として―」は県内発行日刊各紙の綿密な紙面分析によつての考察で、当

時の市民の事変観を再生し、民衆意識の軍国主義化に、マスメディアがいかに大きくかわつていたかを、政治・社会面のみならず意識の(文化的)発露ともいえる文芸・演劇などの紙面をも丹念に調べて、鮮明に描き出しています。氏には他に山梨をフィードに民衆意識を考察した論考として、「満州事変と民衆意識に関するノート―「甲府連隊」存置運動を中心に―」があり、山梨の近代史では未開拓の分野の研究として注目されています。

◇千田氏「要害山城の構造」は、躑躅ヶ崎背後の要害山城に幾度か足を運ばれ、木目細かな地表面観察を通じて精緻な図面を作成して、山城に残る遺構の全容を明らかにし、そのうえで全国各地の事例と比較して武田氏滅亡以降の改修を立証しています。要害山城の改修は、一条小山の甲府城築城と併行して行われたとの推定は注目されるものでしょう。

◇周知のとおり甲斐善光寺は武田信玄によつて永祿元年に創建された名刹で、信玄朱印状はじめ中世・近世期の文書や、多量で多彩な宝物が所蔵されており、信仰研究、宗教史・美術史研究に欠かせない存在となつ

てます。

吉原浩人氏「甲府市善光寺蔵『善光寺如来絵伝』考」はそうした中のひとつで、全国的にも数少ない中世・近世期の三本の『善光寺如来絵伝』の考察であり、氏がこれまで行つた絵解き研究の一連をなすものでありましよう。本誌を携えて実物を拝観したい衝動にかられます。

◇逍遙軒信綱は武田信虎画像・大井夫人画像の作者としてつとに知られ、一般に武田家親類衆の中で優れた文化人としてのイメージが定着しています。

須藤氏「武田逍遙軒信綱考」はそうした信綱の関係文書を念入りに分析・研究され、花押・朱印の形態や使用時期、支配や権限など、武將信綱のあまり知られていない面を明らかにしています。

◇「承久の乱と甲斐源氏」は、執筆者渡辺氏のなじみ深い地に、源有雅の墓(甲府市指定史跡)があることにちなんで、まとめられた論考でしょう。こうした研究は地域を知的・文化的に豊かにします。言わずもがなでしょうが、渡辺氏は詩人として知られています。

◇「土着―初期甲斐源氏の屋形造り―」の

ラインハルト・ツェルナー氏はキール大学大学院生（日本学・博士課程）で、ドイツ・チューリンゲン地方の君主の家族と甲斐武田氏一族との支配制度の比較研究のため、昨年八月から一年間、山梨大学に留学されていました。本論考はその間に執筆されたものです。

◇本号には、力作揃いのこともあって、今後の研究に役立つ精緻な図版が多数収録されております。

印刷の面で、株式会社少國民社には大変お手を煩わせました。おかげさまで執筆者の評判がよく感謝申し上げます。

（高木）

## 甲府市史研究

第8号

編 集 甲府市市史編さん委員会

発 行 甲 府 市 役 所 市 長 室

〒400 甲府市丸の内一丁目18-1

☎ 0552 (37) 1161 内線311

発行日 平成2年10月20日

印 刷 株式会社 少 國 民 社

（題字 甲府市長 原 忠三）